今日のキーワード：「パノプティコン」、「生の権力」

パノプティコン補足

学校関係補足（プリント参照）

・逸脱をなくす：経度の規則違反（怠慢、注意力不足）は「罪」：ミクロな差異化。

・懲罰は禁止ではなく、「配分」を目的とする。逸脱を明示。

補足：「汚辱のクラス」：規律＝「アブノーマル」。訓練のシステムそのものに組み込まれない人は、「異常者」として、システムの外に廃棄されてしまう。システムの「動機づけ（モチヴェーション）」として機能。システムに組み込まれるかぎりで「生き生きと振舞う」ことができる。

→　Normalisation：Norm（規格、規範、正常な状態、平均）　に基づく刑罰制度。

フーコーの意義：深く今の権力について考えてみたい人のために

- 従来の権力論（国家というイデオロギー装置、資本主義における疎外など）の批判。→　マルクス主義からの批判。「フーコーは抵抗の可能性を奪ってしまった」
  →　むしろ「権力」＝「悪」とみなすことこそ、息詰まっている。
- 建築を視覚的に分析し、「装置」として分析→　新たな「建築」の模索？。
- 現代人が自明のものとみなしている価値（個人、人間性、こころ、抵抗、科学の中立性・・・）などが、このような装置によって作り出されてきたこと。それは「最近の発明品」（せいぜい一九世紀以来）。Cf.「人間の死」（『言葉と物』）。
- 新しい知識人の形。「大衆を先導＝扇動する知識人」（サルトル）ではなく、考えるための材料を提供し、「ほかのかたちで考えてみる」ことをうながす。
- ある種の行為が、不必要なまでに「悪」とみなされ、「矯正」すべき対象とされてしまうのはなぜなのか。→　「規律システムの維持」が至上命題。
- ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
- →　それ以後はどうなっているのか。フーコーは別の著作で、規律権力以降の新しい権力のあり方を提示した。それが「生の権力」である。

（1）　安全装置（『安全・領土・人口』という講義で展開

規律権力が許可と禁止という対立で機能するのに対して、安全装置とは、ある平均値＝正常値を定め、さらには超えてはならない限界値を定めることにより、「想定」される蓋然的な出来事に介入し、それに対するコストの計算を行うようなプログラミングの技術。

ある「環境（みりう）」において生き死にする住民の集団を管理することにおいて生命に深く関わると同時に、（政治）経済学という「知」と結びついて物資や衛生的な空気を効率よく流通させることを目的にする。俗に言う「環境管理型」の権力

- population：人口、住民集団　が安全装置の権力の対象→社会の安寧、治安維持（Polizei）。
- 出生率、罹病率、寿命、健康管理、食事や住居の管理。豊かな国家

（２）　「生の権力」（bio-pouvoir/bio-power）

- 『性の歴史』１（新潮社）。
- 「死なせるか生きるままにしておくという古い権利に代わって、生きさせるか死の中へ廃棄するという権力が現れた、と言ってもよい」（第一巻、175）
- ・「一九世紀は性を抑圧してきた」という仮説の批判。
- ・むしろ性はさまざまな語らせられるようになる。→　「告白」「精神分析」
- ・性的なほのめかしをすべて数え上げる・・・「性についての言説を生産する仕組み」。
- ・ヒステリー（シャルコー）、女性の身体、家族のコントロール
- ・生命についてのさまざまなテクノロジー
- ・ナチズム。「生物学的危険」血の純粋さ
- 生の権力
- ・かつての権力：死なせるか、生きるままにしておく
- ・新たな権力：生きさせるか、死の中へ廃棄するか（「汚辱のクラス」が「アブノーマル」とみなされたことと関係）

参考：

例）ドゥルーズの「コントロール社会論」

・君主型権力→規律型権力→コントロール型権力

・ コントロール型権力とは

コミュニケーションをあやつる権力

病院、教育、職業環境の変化。

何一つ終えることができない。

サイバネティックスとコンピュータ

非コミュニケーションの空洞や断続器を作り上げること。